# 寒菊

はじめに
序
花
黒衣の少女
寒菊
相模川のほとりにて
真夜の自動車
花野　一
花野　二
六月の午後
遠い空を見つめて
大井駅頭にて
書簡原稿
灰がら
冬木
小さき木の実
白い顔
冬雲
生命の光りについて
沈潜
萱はら
憂愁の底辺
襟裳岬
黒い視点
玉ねぎ
多摩川にて
富士山
錯乱の工区
工区の夕べ
晩秋の工区
工区の夜
乾燥讃歌
ある日は
名辞と実相について
枯野
海
荒涼の中から

白い夜の道に
生きる
葱を洗う妹
天使のような妹
嫁ぎ行く妹
存在
ゆき山の道に
雪の底に
死
骨骸戯画
黒い月と骨
骨が鳴る
古い沼
般若
私の詩について　一
私の詩について　二
私の詩について　三
私について　一
私について　二
秋の日
後記
略年譜

目次

はじめに
序
花
黒衣の少女
寒菊
相模川のほとりにて
真夜の自動車
花野　一
花野　二
六月の午後
遠い空を見つめて
大井駅頭にて
書簡原稿
灰がら
冬木
小さき木の実
白い顔
冬雲
生命の光りについて
沈潜
萱はら
憂愁の底辺
襟裳岬
黒い視点
玉ねぎ
多摩川にて
富士山
錯乱の工区
工区の夕べ

晩秋の工区
工区の夜
乾燥讃歌
ある日は
名辞と実相について
枯野
海
荒涼の中から
白い夜の道に
生きる
葱を洗う妹
天使のような妹
嫁ぎ行く妹
存在
ゆき山の道に
雪の底に
死
骨骸戯画
黒い月と骨
骨が鳴る
古い沼
般若
私の詩について　一
私の詩について　二
私の詩について　三
私について　一
私について　二
秋の日
後記
略年譜

## はじめに

　これは髙野邦夫が一九六二年（昭和三七）二月に、五月書房から出版した第一詩集『寒菊』を電子書籍化したものである。父が三三歳の年で、同じ年の四月に母と結婚、翌年に私が生まれている。父が次の詩集『氷湖』を出したのは、一九七八年（昭和五三）だから、十六年の歳月が流れている。
　父が生前に出した詩集の中で、『寒菊』だけは結婚前に出版したため、知人でも手にした人間は少ないと思われる。父は思い入れを込めた詩集が、評価されなかったことを嘆いていた。そこで、父の死後二十一年を経た今日、改めて世に出してみることにした。久し振りに読み返してみると、俳句や漢籍による言葉や難読の漢字が多く、そのままでは現代の人に受け容れられないと思った。そこで、ふりがなを多めに振り、煩瑣はんさであるけれども、多数の注釈をつけることにした。
　できる限り原本に忠実に復刻したが、誤植と思われる漢字などは改め、それについては注釈で触れた。送りがなについては、現在の用法と異なる場合も、あえてそのままにした。原本には『寒菊』出版当時の略歴がついていたが、私の従兄いとこである故・山川清秀氏が作成したものに私が加筆したものに換えた。
　最後に、詩集『寒菊』の電子書籍化を快諾して下さった五月書房新社に、心からお礼を申し上げたい。

　二〇一八年十月七日

髙野敦志

序

詩集「寒菊」は　私が過去にもった私の喜びと哀しみをその出発点とする　その過去の喜びや哀しみに触れることを　かって私は恐れていた*一　その過去の様々な心象の在り方が　現在の私に触れ　私に食いこんで　私の平安を乱すことを　然しかし歳月は私の中から一切を洗い去った*二　私は私の過去を客観として触れることが出来るように思えた　そうして読み直した私の詩　其処そこにある喜びや哀しみは　私という一人の人間の心の歴史として　読むに耐えるように思えたし　此これを私の人生に於おける基点としつつ　未来に対する一の道標としたいとも思った　此処に詩集「寒菊」を刊行し大方の諸賢の賢察を請う次第である

## 花

夜の女神の瞳のように
月の中で揺れている
静かに
うすい紫に染める風の中で
変幻する瞳の色
愛よりもかなしい
それは面影おもかげの花です

## 黒衣の少女

透とおった瞳の
視線のむこうには
果てない未来の蜃気楼しんきろうがある
それは　耳から入って
瞳に抜けて行く
幸福の空しい影である
夢想が
しっかりと捉とらえて離さぬ
凝視ぎょうしの世界の果てから
むなしい音楽の流れて来るのを
じっと耐えている
掌の淋しい戦そよぎである

## 寒菊

口紅べにほのか寒菊見入る瞳かな

君は師走しわすの風に立つ
寒菊の花であった
その瞳が微笑み
私を視つめた時
風は凪ないで
私は君の馥郁ふくいくたる匂いを感じた*三

ああ
いま君は微笑み
私に呼びかける
じっと　視つめ視つめて

ふとそらした羞恥しゅうちの瞳の愛いとしさ
恥じらいが然しかも
しっかり握った掌の中にあっては
ゆるがぬ生命の力を
私に直接じかに感じさせてやまないのだ

私は私が美しくなって行くことを感じる
私は私が清らかになって行くことを感じる
私が私でないものに
一歩々々近づいて行くことを感じる
私が私を乗り越えて行く
その心の階程を
私は君によって直接じかに感じてやまないのだ

風雪が君を鍛きたえた歳月の中にあっては

君は荒撫こうぶの地にも尚なお匂う*四
寒菊の花であった
やさしみ　視つめる瞳が
静かに光年の中に浸透して行く時
君は選ばれた一の形象であると
私には思えるし
風の中にあっても散ることを知らぬ花びらは
きっと　その風に耐えつつも
しべの香りに
私の胸をときめかさせずにはおかなかったのだ

真摯しんしなる瞳よ
ものを視つめて居た
君の瞳が
ふっと私の前にあって眼つぶる時
睫毛まつげは私の頬を馴なでて*五
君は私の胸の中に居たのだ
愛憐から愛憐を越えたお互の力が
ひしと抱きあった瞬間を
ああ　何びとが侵おかすことを得よう

真夜まよは知らぬ*六
喫茶店の片隅にあって
君の髪を愛いとしみ
君の掌を愛しみ
総すべて君の一切を愛しみつつ
君に投げかける私の心を
君はしっかりと
君のやさしい掌の中に
いつまでも握っていてくれたまえな

## 相模川のほとりにて

私達は相模川さがみがわのほとりに立って居ました
||逃のがれなくてもいいのに
けれどもそうせずには居られなかった
二人の心が
鶴巻つるまきの駅で*七
「どちらでもいいです
　早く来る方の電車の切符を」と言わせて
皆から離れて来たのでした
嫉視しっしと疑惑と中傷の渦から逃れるために

今あなたは私のかたわらに立って居ります
厚木あつぎの駅から道に迷い迷いつつも*八
一里を歩いて
それでも疲労を知らぬお互の心が
お互の瞳の輝きをみつめて
心に限りない喜びを抱いて
たって居るのです

此処には私達を侵すものはありません
大地は悠々として動くことをしなかったし
十一月の空のすがすがしさ
潺湲せんかんたる流れの響きと*九
その心よい泡だちと
一切は透明の中にあって
各々は
その色彩と形態と
それぞれの量感をもって
ゆったりと私達を迎えてくれます

それは壮麗と言っても良いし
典雅でさえあるとも思えるし
あるいはまた
私達に祝福をおくる
光悦の微笑みに満ちていると言っても*十
良いのではないでしょうか
私はそんなふうに考えて居りました

冷たい台石の上に座って居ても
私達はそれをちっとも冷たいとは感じませんでした
太陽の光がきらきらと小波に反射し*十一
枯草の匂いは
遠い故郷の香ぐわいのように
胸処むなどを衝ついて
私達はもうお互の心をまさぐる不安をもつこともなく
お互いがお互いの中に浸透して行くのを
心にじかに感じて居たのであります
そうして
お互いがお互いに持った心の傷手いたでが
だんだんと洗われて行きました
古い絆きずなの中にあった
あらゆる紛擾ふんじょうの堆積たいせきの上にあっても*十二
お互いがお互いの上にお互いの心を塗りつけて行けば
色彩は澄み
心は天空に躍って
純粋なものに返り
お互いはかって生まれた日の*十三
呱々ここの喜びの声を*十四
お互いの心の中に認めあって居たのではないでしょうか

太陽が静かに運行し
落日の気配が濃くなった時

私は山脈なみのむこうを指さしながら
その壮麗を語りました
そうして
太陽が没っして行くように
私はあなたの膝の上にうつぶせにならずには居られませんでした
その時　喜びともない思いが
不思議な感動を私に与えて
私はあなたの膝の上にあって
あなたの香りにむせびながら
私は私の目頭が熱くなって行くのを
じっと耐えて居なければなりませんでした

その時
あなたは何処どこを視つめて居たのでしょうか
遠い遠い太初たいしょの中から生まれた
母性のやさしい瞳に
永遠を一瞬の中に捉えながら
掌はやさしい愛撫を
私の髪や頬のあたりに
限りもなく与えて居てくれたように
私には思えてならないのです

## 真夜の自動車

疾駆しっくする真夜まよの自動車
それが停車し
そうして
あなたは私と別れて行きました
今までかたわらにあって
ひしと握って居たあなたの掌が
寄り添うて居たあなたのほのかなる体温のぬくとみが*十五
或あるいはあなたの匂いが
総てあなたが
真夜の冷たい空気の中に消えて行った時
私は振返ることもせずに
じっと自動車の片隅に身を寄せて
あなたのことを思うて居りました

自動車は疾駆して行きました
午前一時十二分品川駅発京浜東北線蒲田かまた行きの電車に間に合うべく
その時
真夜の街道には点滅するネオンの灯のわずかに
民家は一切の灯火を消して街の底に眠り
静かに横たわって居りました
黒く四角く影をつくる民家が
後へ後へと流れて行く自動車の中
しきりに私に話しかける運転手の
僅わずかにその気をそらすまいと言う努力を
私はつづけながらも
私はあなたを思う私の心をどうすることも出来ず
ただその思いの底に浸って行こうと

そんな風に考えて居たのでありました

喫茶店の片隅にあって
あなたは私の肩に凭もたれ
あなたは私の掌に掌ふれつつ
私の書いたあなたへの詩を
私の耳許みみもとでささやくように朗読して居りました
私の詩があなたの口唇こうしんからこぼれる
やや低く澄んで落ちついたあなたの声が
あなたのほのかなる匂いにふくらみつつ
私の耳許に訴えてくる
それをあなたは　私が如何いかに思うて居たか御想像でしょうか*十六

私は私の心の切なさを振返り
そうして耳にひびいてくる私の詩の中に
じかに私に対するあなたの思いを汲みとっていたと
そう申したら
それはあなたへの冒瀆ぼうとくでありましょうか

いいえ
どうしてもそう思えない心が
あなたを信じ
あなたに寄りかかろうとして
あなたの面影をまなかいに求め*十七
そうして
真夜の自動車の中
冷たい車窓に頰を寄せつつ
まばたきも忘れた眸ひとみで
||それはものを視る瞳というのではない
空漠たる天空を凝視し
幻影ならぬあなたの実体を

そこに描き
そこに換置かんちしようと一心に思うていたのでございます

その時あなたは如何いかな思いにひたられて居られたことか
私の知って居るあなたの室に
ガスストーブは静かな焔をたたえ
展のべられた床の中にあって
あなたが視つめる室のありさまは何時いつもと変ることなく
机があり　茶簞笥ちゃだんすがあり
書物は静かに頁ページを閉じて
その傍に置かれたあなたの黒いバック
私の知らぬものといったら
展べられた床と
床の中のあなたと
そうして　静謐せいひつな面影をたたえて
睡ねむり行くあなたの寝姿ばかり

その時夢が如何にあなたを訪れたことか
知りも得ぬ世界を探って
私の心は　私の思いを
あなたの知らぬまに
あなたの中に
秘かにひそませて行かずには居られなかったのでございます
金色の鈴の音か
鈴の音にふさわしいあなたの微笑みか
枕にたくして
夢は私の知らぬ世界に流れて行ったのでありましょうか
ああそれがわからぬ
そうです
それは致し方ないことでありましょう
でも私はそうなのでありました
あなたの夢にまでひそもうと言う

私の貪婪どんらんさ*十八
それを恥じる心はあるけれども
そうせずには居られぬ私の気持を
私は私の中に諒りょうとして*十九
あなたのことを一心に思うて居たのでございます
自動車は疾駆し
自動車は私の見知らぬ街を走って行きました
午前一時十二分品川駅発京浜東北線蒲田行きの電車にまにあうべく

寝静まった真夜の街を
吾一人醒さめたりと思う私の心をのせて
吾一人さめたりと思いつつも
自からは知らず
陶艶たる思いの中にひたって吾を忘れ*二十
あなたの総てを心に描こうとする私の思いと
やや疲労した私の肉体をのせて
一路を　ただひたすらに疾駆する
真夜の自動車の中でございました

## 花野　一

花野を歩み*二十一
遠い山を視つめて居ました
流れる雲の果てに
遠い山は横たわって居りました

||私があなたを思うことは

遠い日の哀しみにとらえられて
さまよう思慕しぼの瞳に
秋の蝶は流れて行きました
黙していた私は
そうして遠い山を視つめて居ました
遠い山の果てに
あなたの瞳をみつめて居ました

その時
落日は荘厳の色もて*二十二
花野を包み
金色の乱舞の中に
私はただただ突ったって居りました

## 花野　二

花野は尽きるなく
空は蒼々と澄んでいた
自然は悔くゆるなき時を抱きて
微笑みは
劫初ごうしょの空にたゆとうていた*二十三

花野に季節流れ
蕭条しょうじょうたる時来るとも*二十四
私の心に抱いた思想は
季節とともに歩み行くであろうことを
私は知っていた
ゆるがぬ純粋の中にあっては
死することも必然であった
わが愛の激しさが
抱かんとするものの中に倒れたとても
ああ　私の死は
平安であることを予知する

天辺てっぺんに雲流れ
花野に鳥は舞いて
私の足下あしもとに
虫はちちと鳴いていた

## 六月の午後

コーヒーのけぶりほのゆれ　瞳すみ
人は瞳を静かにしばたき*二十五
旋律はかそかなるときめき*二十六
展景は窓に
窓には笹竹のささやきの声し
窓には乱反射するマイカナイト*二十七
窓には鳥たちのついばむ紅の花びら
海は遠く
海底にねぶる月日貝つきひがいの放射脈は波に*二十八
海は青き　白き　波のたわぶれ
人は瞳よ　ほのゆれの髪

耳朶じだの感情と　感性が敏さとい皮膚の白さ*二十九
夢に　闇の夜をたゆれるうつぎの花の白さ*三十
コーヒーのけぶりほのゆれ　銀のさじのきらめき
指の　象牙ぞうげの　爪に流れる　さくら貝の息
瞳には空
空はアペイロン*三十一
アポロなる神います窓の遥はるか*三十二
静かなる雲は　人の瞳に
たまゆらの放心を映す*三十三
六月の午後である

遠い空を見つめて

あなたの居ない空虚な机の上には
主なき茶碗の湯気が
ほのかにたちのぼって居ました
牛乳瓶にさされた白菊の花には
良く見れば転々とした埃ほこりがあって
私はあなたの居ない淋しさを心に思わずには居られませんでした

私はあなたの居ない心の空虚を噛かみしめて居ました
その由よって来たる原因をも考えて居りました
そうして　誰にも知られてはならない
そう言う思いの侭ままに
常日頃の会話を皆と続けて居らねばなりませんでした

激しく接吻くちづけた二日前の思い出
そう　それは思い出と言わなければならないほど
遠い日のことのように思えてなりません
お互いがお互いを信じあって居ればこそ
お互いの上にお互いを印いんして行かねばすまない*三十四
そうした気持を誰が批難することが出来ましょう
お互いがお互いを信じあって居ればこそ
お互いの中からお互いを奪いつくさねばすまぬ
そうした気持を誰が批難することが出来ましょう
そうして時間は二日も無為むいに流れて
あなたの机は空虚なままに
その主の姿を見ることが出来ないのです

どうしたのでしょうか
どうしたのでしょうか

私は思うて居りました
それはあなたに投げかけた心が
そのままふっと消えてしまったような
空虚な思いでありました
信じて居るのに
信じて居ればこそ
私は常にあなたの面影を求めずには居られなかったのです

ああ　私はあなたの生活の一部しか知らない
今私はあなたを何処へ置いて想像したら良いのでしょうか
ただ　茫漠ぼうばくたる中にふっとあなたの瞳をみつめ*三十五
輪廓をとらえ
髪の毛の触感の記憶の中に
あなたを偲しのんで居るばかりなのです

陽は次第に曇って
薄ら寒い気配が
教室の中に流れてまいりました
遠い工場の汽笛きてきが一時を知らせて
私はあなたと逢えるであろうその時までの時間を
指折り数えていらだたしさを圧おさささえて居たのであります
人の世の　此の私の愛しみについて
愚かよと笑う人は多かろうけれども
何処までも愚かの中に徹っして行こうとする自分を
むべなりと視つめて*三十六

母を慕う赤児あかごのようにも
私は遠い空を視つめて
ふっと深い吐息をせずには居られなかったのであります

## 大井駅頭にて

流れ行く人波を見つめて　私はあなたのことを考えて居りました
静かに流れ逝ゆく遠い過去の断片を集めては
形成されるあなたの像の
然しそれが完全な形をとらないことを
少しくいらだちながら

一行の詩は
一度ひとたび私を振返らせました
一連の詩は
私の思いを一途いちずにあなたに走らせました
そうして
あなたが遭遇そうぐうせねばならなかった今日のことにしても
それを一つの宿命であろうかとも
観じて居たのでありました

遠い日が私に返って参ります
あなたから逃れた私の過去をもまじえて
あなたは私に歩んで居りました
私はあなたへの道を自から閉ざそうとして
永い年い年月を無為に過して終しまったのでしょうか

愛いとしい人よ
ああ　私は今そう呼ばずには居られぬ
あなたの像を求めて此処に立って居ります
運命がお互いに振り切るべきものを振り切って
共に歩み行く一瞬に恋がれて
私はあなたを待って居るのです

もう約束の時間まで幾分もありません

私はその秒刻を数えつつも
その不安の中から　湧き出るあなたへの期待を
棄すて切ることが出来ないのです

もう幾分もありません
然しあなたは此処へ来られる
晴れやかな顔をして私と歩み
私と腕組んで
未来への眺望の瞳をそっと振返って
私に　あなたのそのやさしい瞳を送ってくれることを
私は信じて居るのです

## 書簡原稿

咳こんで六尺の軀からだを蝦えびとなす

咳こんで砂丘に海の声もなし

貴女あなたに何もしてあげられないことは淋しい
もう何も言えません　黙っていることよりほかに表現がないならば苦しいけれども貴女が苦しんで居られるように　私も貴女の居られぬところで苦しみます　どうぞ貴女のお気持の侭ままになさって下さい
何時にても何ものをも棄てても貴女を迎えられることの出来る私として　又また誰よりも貴女の幸せをねがっているものとして何時の日か晴れやか顔して　手をさしのべて下さるあなたを
お待ちして居ります

灰がら

幸せというものの灰がらをみつめ
風にふるえるアンテナと
感性が奏でるヴァイオリンの響きをきく

冷え切ったパーコレーターは*三十七
アレルギー疾患の遊離されたヒスタミン*三十八
小灰蝶しじみちょうの淋しきふるえ

心には
プレスされた氷層の夜
残された書殻

灰がらがふるえる冬の夜は
全ったく
晶形針状結晶の細片の底に
白く白くねむったと覚える

## 冬木

季節の淋しい息づきの中で
留別りゅうべつの涙を風にからして*三十九
遠のいて行く
影をみつめる

此の騒擾そうじょうの中にあって*四十
孤独をいたむこころの
或ある日は硝子ガラスのかけらで
己おのれの瞳をつきさそうとした

去り行く人よ
幸せであれ
こころには祈るけれども

時雨しぐれともなく降りそぼる街*四十一
突っ立つ冬木
わが生命を愛しむとてはなけれども
酒に溺れようとする心を
私は僅わずかに支えていた

## 小さき木の実

愛するがよい
小さきみどり色の木の実を
もの言わぬものよ
冬の陽のさびしく
埋火のひそやかなる*四十二

燃えるものがない故ゆえに
ことさらに
愛するがよい
かかる小さきものを
たなごころにみつめて

つくづくと誘われる哀しみを
こころにふかく
とらえるが良い

## 白い顔

白い顔の人が去って行こうとする
私は哀しみをたたえて
雪の街を歩いて行く
真底から愛した人が去って行く
去って行く雪の街は
白日はくじつに照らされて
道行く人の心は明かるいのに
白い顔の人は去って行く
去って行く人を追うまいとする心故ゆえに
私は歯ぎしりして耐えているのに
白い顔の人は
今日も私の見知らぬ人と談笑していた
耐えようとする心と
人の幸せをねがう心と
過去が背筋をどやしつけるような
そんな思いが
私を突きおとす
私を突きおとす

## 冬雲

去って行った人のことについて
多くを語るまい
もう一度
私は私の人生を歩んでいこう
人生の安堵あんどをみつけたと思えた日も
虚仮こけにすぎなかった*四十三

空しい思いが
肌寒く背筋をすり抜けて行く
虚脱感が我の全身にあって
今私は誰とも語ることをほっしない

黙念として耐えるのみだ
耐える力が私にはある
そう思いたい
生き抜く力が私にはある
そう思いたい

人生の哀歓の限りをつくして
総てを
私はあの人に打こんだけれども
私はいま
孤独なる本来のわたくしに
還かえる

## 生命の光りについて

生命あるこころをみつめて行きたい
生命あるこころから生まれるものを
みつめて行きたい
哀しい生命があきらめの中に
酔うた酒の夜のことなど言うまい
生命は尽きるなき泉のように
湧きいでてくるものを
私は私について
総て信じたい

きよらかなるものは生まれいづる
私の生命の中から生まれいでたものは
私であって
私以外の何ものでもあるまい

生きて行けばいいのだ
生きて行けば
その中から生まれくるものがある
それはいいものであって
みにくいものではあり得ぬし
それは価値であって
価値なきものは
私の中から生まれ来る筈はずもないのだ

生きるとはそういうことなのだ
私は私の中から生まれくる
私自信の光をみつめて生きて行けばいいのだ*四十四

## 沈潜

人生には何もない
そう思うていい
私の中にあるものもむなしい
そうして
むなしいと思えるものが
わたしの中には慥たしかにある
それを認めればいい
そのままでいい
愛があれば愛すると言って否定せぬがよい
愛がなければ愛さぬと言って否定せぬがよい
それでいいではないか
愛があれば幸せを祈ってやるがよい
愛がなければ忘れ去って行くがよい
迷悟めいごが隣となりしている世界を
見極めよ
火に油を注いだ過去
もう
問うまい

萱はら

さやさやと鳴れるま萱かやの秋の野に人恋ひ居れば
さみしかりけり

つくづくと思へばさみしき心よと萱はらにして
涙たれぬる

すすき穂を分け入りにつつ高なびく雲の行方を
みるが淋しゑ*四十五

萱はらの萱にかくれつさみしみのそれか涙を
のごひけるかも*四十六

海阪うなさかは寄せくる波のつばらにもまさに眼に見つ
さみしかりけり*四十七

## 憂愁の底辺

その瞳の　憂愁の底辺は
眼窠がんかの底に隠れた*四十八
湖は淡々として
季節を映すばかりである

ふと煌きらめく絶望の鋭角
千百の罪の数々
意識
生きるが故に負わされた
懊悩おうのうの中から
視つめる山々が
遠く眠っている

ああ
夏の日の　烈日れつじつの
遠望の山景に隠れ*四十九
埋もれて行った
青春の讃歌よ
しんしんとした
孤独の日々を貫く
一本の銀線は
無いか

襟裳岬

地の骨と日高ひだか幌尻ぽろしり*五十
恐竜の歯ぎしり
モシリバ*五十一の海は　果てない眼球の広がり
さっくり割れて　どどと崩れ
泡だつ海には
揺れる　揺れる　昆布の
天の墨滴ぼくてき
したたり流れる　海の怒りに
水を低く翔かけり行く海鵜うみうの鎌首
風が浚さらって*五十二
天を染め行く黄塵こうじんの紋様
牧牛の群れは
飴色の背を陽にさらし
物憂ものうい瞳を　海に投げる

## 黒い視点

黒い視点の底から
夜は流れ
夜は流れて
夜は　黒い視点の底に
吸いこまれて行く
茫漠とした心象の
夜は灰色で
無韻むいんの葬列によって綴つづられる
夜は
山なす屍をその底にねむらせ*五十三
渺々びょうびょうの海原うなばらの底に*五十四
静かに誘いこまれて行く

## 玉ねぎ

玉ねぎの皮をはぎ
玉ねぎの皮をはぎ
涙をこらえながら
玉ねぎの皮をはぎ
はいで終ったその皮に
心の鋭角をぷすっぷすっとつきさし
心がこんなであってよいものかと
こころをきゅうっとねじまげてみる*五十五

玉ねぎの皮をはぎ
玉ねぎの皮をはぎ
はぎ終ってしまえば
何にもなくなる
こころってそうではないか
こころってそうではないか

玉ねぎの皮をはぎ
することがないからこうしているんだと
玉ねぎの涙をいちめんにまきちらし
こころってもういやになり
こころってもうない方がいいと思い
こころってうつろなのに
うつろをみつめる
眼があるからなんだと思い
ああ
こころって死んでしまえ

玉ねぎの皮をはぎ

玉ねぎの皮をはぎ
玉ねぎの涙を一面にまきちらし
玉ねぎの涙の上に
玉ねぎをかぶせ
玉ねぎのうえに
玉ねぎの涙をそそいでいる

多摩川にて

木枯こがらしの中に私は突ったって居りました
多摩川の流れるところで
私はあなたを思うて居りました
ああ　こんな日の日曜日に
私は此処まで歩いて参ったのでございます

鳥も鳴かぬ　緑も映はえぬ
一月の一七日でございます
遠い連山はかぐろく*五十六
彫塑ちょうその壁のように見える堤つつみの上*五十七
石ころの河原

風にふるえる僅かな立木
そんな処で*五十八
私はあなたを愛していると
つぶやいたのでございます

もう何日逢えぬことか
いいえ
あなたはいつも私の目と鼻の先におられますのに
冷たい顔をされて
私を見る瞳を
あなたはどこぞへお忘れになったのでございましょう

　　さみしさや華のあたりのあすならふ*五十九
私は芭蕉のそんな句を
つぶやいても居りました

思い出すことが苦しいのです
あなたの移り香がにむせんだ或る日の思い出や
何時かは多摩川の台地のほとりにあって
枯草の中に静かに語りあった一刻の喜び

すべてすべてむなしい夢なのでございましょうか

此の掌が知っている
あなたの掌のぬくとみ
われとわが掌を握ってみれば
哀しみは深甚として*六十
私の中を突き抜けて行きます
見えない処にあって
あなたを思うことの苦しみ‘
いいえ
もうあなたと逢いたいと思う心を
私は棄てたいと思うて居ります
あなたに対する私の愛
　　野火闌たくる流離哀しき広寒宮こうかんきゅう*六十一
私は私の句を何回となく
心につぶやいているばかりでございました

富士山

富士が見たい
私は駈かけ抜けるようにして
尻手しってのごみごみした町中を通りすぎて来ました*六十二
川崎の裏駅の当りで
ふとみつめた富士の荘厳
それはまさに夕暮れの中に消え去るうとする時のまの
彫塑ちょうその静寂でございました

富士がみたい
私は駈け抜けるようにして
尻手の町中を通り過ぎて来たのでございます
私の知らぬ新道が
鶴見操車場の陸橋につらなって居りました*六十三
夢見が崎や三つ池*六十四
陸橋は既すでになかば暮れようとして
通る人といったら
家路を急ぐ工員らの群れのばらばら
私は其処に凝然ぎょうぜんと立って*六十五
富士をみつめていたのでございます

汽車の轟音ごうおん　汽笛
点々としたライトの宙に放散する
田畑と工場と丘辺のつらなりの果てに
富士は毅然きぜんとして立って居りました*六十六

私があなたを思うことは||
いいえ
その思いが私を此処へ来させたのかも知れませぬが

あなたを通して私が私の真実をみつめたと同様に
私は私がみつめる富士を通して
私をみつめ
私のこころを浄めたかったからなのでございます

あなたが私に遠いように
富士も遠うございました
そうです
そうしてあなたが私から隠れて行ったように
富士も夕闇の中に
今その姿を没っしようとしていたのでございます

少年の日から幾度も仰いだ富士は
美しゅうございました*六十七
その遠景の中に画然かくぜんと立つ姿と*六十八
セピアの色を次第に濃くして暮れなずむ空の色と*六十九
そうして連山は
そのゆるい曲線を何処までもつらねて居たのでございます

どんなあなたでもいい
たとえ愛して戴いただけなくとも*七十
常にあなたのかたわらに
私を置いて下さるならば
此のような言葉が
誰にどうして申せましょうか
そうして
私はあなたに申しあげたのでございますけれども
つらいくるしい一日々々の中に
哀しみがかもす傷いたみの中に
それは本当であったと
今も尚なお思い返すのでございます

私は今日多摩川の流れをみつめて居りました
私は風の中を歩いて
二時間有余ゆうよもさまよい歩きました
悠久なものに触れたい
移ろわない
確実に其処にあって
何時までも変ることのないもの
私はその中に身をゆだねたいと思いました
寒い風の日でございます
肌を突きさすものが
堤の上にたっていると
無数にとんでくるような日でございました
それでも立って居たのでございます
時間を忘却の淵底えんていにねむらせて*七十一
流れ行くものを
私は此の眼でしかと捉えたいと思ったのでございます

私はいまその心の侭ままに
富士をみつめて居ります
瞬間的なもの
それを追う心にかって富士がなかったのは*七十二
酔い痴しれた或る日の私に
記憶がなかったのと同然ではないでしょうか

私が其処にあらしめるもの
そうして
あなたではありますまい
富士はたしかに其処にあったけれども
目に視みえぬあなたの心は
私には　推測よりほかに何を知ることが出来るでございましょう

私は知りたいと思うあなたへの心を棄てたいと思いました

私は信じたいと思うあなたへの思いを棄てたいと思いました
知りたいと　又は信じたいと欲っする心さえなければ
私は何時までも私を視つめて居ることが出来るでございましょう
私はただ視つめて居たいのでございます
富士のように　多摩川のように
変容のない私の心をでございます
思い出の中に生きるとは言いますまい
私が愛していたその人を
今も私が愛していると
その心許ばかりが私に大切なのでございます

さみしい孤独者の愛でございます
寂寥せきりょうを極めたもののみが持つ愛でございます*七十三
あなたは何処ぞへ行かれるのでございましょうか
自からを不幸にしながら一人生きて行かれるのでございましょうか
あなたがあなたの幸せを求めて生きるというその道が
私にはわからないのです

富士よ　富士よ
私は叫び呼びかけて居りました
そうして叫んだ私の声の
それは生命ある限りつきぬ
私の詩なのでございましょうか
生命ある限りつきぬ
それは私の愛なのでございましょうか
そうして頰を伝うて流れた
涙の中にこそ
私は私の生命の結晶と
私が歩まねばならぬ苦難の道程
それは千年の歴史の中からもたらされた
私の一筋の道をみつめていたのでございます

そうして
あなたよ
あなたよ幸せであれという
私の心からの言葉を
あなたの夢寐むびにも知らぬ処にあって*七十四
私は一人つぶやいていたのでございます

## 錯乱の工区

林立する煙突
幾何きか図形の氾濫
工区は
灰色と代赭色たいしゃいろの煙にくすみ*七十五
烈日は延々と続くアスファルト道を*七十六
照らしていた

疾駆する自動車
石炭殻せきたんがらの山
少年は血膜炎の眼をこすり
鉄鋲てつびょうは間断ない響きを
虚空こくうにうつ

何か意味があるか
執拗な問いに私の胸は困惑していた
此処に私は止揚しようするものをもたなかったし*七十七
殆ほとんど意味をもたなかった

塵埃じんあいが捲まき起こす*七十八
烈日の乱舞の中
鉄鋲の音は
寸秒毎ごとに私の胸廓きょうかくを圧迫し*七十九
鉄骨の遥かに閃めく熔接光は
あらゆる感性の間隙かんげきを縫って*八十
私の心象の一切に
雲母うんものようにへばりついていた*八十一

## 工区の夕べ

工区の夕べの
うら淋しい匂いよ
石炭殻が塵のように舞ってくる
此の裏みち
もはや希望とてない
そんな心が
私の上に重たくのしかかり
そうして
その心に凭もたれるような思いが
灰色の感傷を誘うている

私は
白壁しらかべのずっと続く此の裏みちを
一人とぼとぼと歩いていた
ああ　重い重い轟音が私に響き
見つめれば
はや夕暮れの空を染めている
鉱炉こうろのいとなみ

蒼冥そうめいの*八十二
天を浸蝕しんしょくする
銹さびた鉄線の弧
生ぐさい風が
せせら笑うように
腐ったビルの街角を曲るとき
犇ひしみ鳴る鉄骨の響きを*八十三
私は
青白い掌に

そっと聞いていた

## 晩秋の工区

工区は煤煙ばいえんと砂埃りでもって蒙々もうもうとけぶり
煙突ばかりが天を突きさしている
鋭角と直角との稜線りょうせんのつらなり
無表情な白壁がうす汚れた顔を突き出し
灰色の塀へいに植えつけられた硝子の煌めきが
俺の視覚を突き射さそうとする
総てが乾燥したものの中にあっては
道端みちばたの草々も生気ない敗衂はいじくの色に包まれ*八十四
騒音は俺の内臓を乱打する
犇ひしめく瓦礫がれきの山と
ひしゃげた屋並やなみのよろめきと*八十五
人間の世界からは遠いものが
大地を覆いつくして
お互たがいは脈絡のない顔して
此の黄昏たそがれをぞろぞろと歩いて行く

## 工区の夜

白壁のはてなく続くところ
工員寮の灯は消え
鈍にびて運河の果てないところ*八十六
朽船くちぶねの
静寂の

思惟のさまよいの果てに*八十七
代赫だいかく色に燃えるは*八十八
うすき胸と
瞳と
あてない処には
あてないもののつらなり
起重機の*八十九
鉄骨の
死

歩み
海近い埋立て地の中に
一人たてば
時たまは
魂ゆする
海鳴りの
響ひびき

## 乾燥讃歌

背筋をどやしつける
工区の轟音
絶望が綴つづる内部世界に対峙たいじする*九十
外部世界の圧迫
凄烈せいれつな*九十一
乾燥の讃歌
鉱炉燃ゆる臨港地帯
千鳥町ちどりちょう　水江町みずえちょう*九十二
街衢がいくはその名に値せぬ*九十三
荒涼の
個への絶縁
石油会社の錯綜さくそうのパイプは
人造人間の血脈の如ごとく
その煌めきは
白日の次元に
反射する

ある日は

固くなった饅頭まんじゅうをかじりながら
淋しい支那町の裏通りを歩く*九十四
頑かたくなにおし黙って居た一日の疲れ
夕暮の冬陽の影淡く冷い風は流れ
厨房ちゅうぼうのうす暗い土間に彳たたずむ異国の女*九十五
願いとては一つもない
枯れ萎しなびた葱ねぎのようなこころが
ああ　底には深く燃えるものを感じる
いらだたしさ
淋しい支那町の裏通りを歩けば
鶏はその首をうち棄てられ
紅葉のような鶏冠が*九十六
掃溜めの中でうちふるえている

## 名辞と実相について

私の去いんで行きますることについて*九十七
そないにとやかく言うて下さりまするな*九十八
私は去んで行きまするけれども
人の幸せを願う心に
そないに偽わりはないはずでござりまする
私は私の誠実と思われまするものが
すべて破れ去ったと
ある日の夜の闇の中に思うて居りました
ああ　私はその時の夜を苦しみ
その前からもずっと苦しみ
それからも日夜私を苛さいなんだ苦しみについて
どないに語ったらよろしいのでござりましょうか*九十九
此の世の中は総て闇のように思われましたし
私の周囲には
どこにもかしこにも聳そそりたつ壁があるばかりで*百
どないに悪掻あがいても
どないに苦しみ喚わめいても
そこから出られぬ私を知ったのでござりまする

私の去いんでいきまするることについて
どないな風評がとんだからとても
どれも此れも私の真実を伝えることは
出来ませなんだし*百一
それがたとえ誤まっていたからとて*百二
悔くゆる私ではござりませんが
此こうして私がそれについて筆を走らせようと考え
そうして今筆を走らせて居るのでござりまするが
その言葉とて

今は真を伝え得ないことを
私はよう知って居りまする
でも　私は何か知って戴いただきたいのでござりまする
異性を求め求め抜いた
私の卑しい心のありようについて
それを誠実と言い　それを純粋と言い
愛と言うた
私のおごりたかぶりようについて
総て一切の苦しみは
私の其処から発ったのでござりましょうか
実を忘れて名めいに走った
その底の空無にさえも気づくことなく
私が求めれば求める程ほどに
私の心は燃えるばかりの
苦しい地獄の底にあったのでござりまする

燃える私の心は
燃え尽きるまで燃えさせねばならないのに
私の名は私の心をおしやり
否定すれば
更に燃えて
いぶり　くすみ*百三
私は生きる力もござりませなんだし
私がそれを肯定すれば
私の去んで行こうとする事相の本質は忘れられ*百四
過去や過去に於ける幻影や
未来に対する期待など
あらゆるものがごちゃごちゃとなり*百五
もう対象を見る力もなくて
がむしゃらなばかり*百六
それは火に油を注ぐようにも
私の心の焦慮しょうりょの地熱を*百七

かいたてかいたてするばかりでござりました*百八

本当に愚かな私を
何と申したらよろしいのでござりましょうか
愚かとも愚かとより表現することの出来ない私であったと申すより
致し方ない私でござりました
欝積うっせきし耐えられぬ時
私は三里の道を歩いて帰り
歩き疲れて酒を飲み
飲んで飲んで飲んだくれて
私は私の身体をこわしつつも
またこわれよと願い
私のどうにもならぬ心を
一刻でもまぎらそうとして
いたのでござりましたし
酔うていなければいないで
どうにもならぬ此の心を
何処にでもぶつけ
あたり構わずぶつけ散らして僅かに満足していた
あわれな私なのでござりまする

狂うたようなそんな生活が
何時まで続きましょうか
聡明と言えば
私にはそんな私の先の先までが
手にとるように解わかっていたことでござりまする
私が駄目になって行く
私が駄目になって行く
それはもう誠実とか真実とか
そう言う名辞より以前の問題として*百九
私の駄目になって行くことが
よう解って居たのでござりまする

そうして総て
私は敗れて終いました
私は去いんで行かねばならない
私はそう思いました
私は私でまだ誠実などというもの
愛などというものを信じて居たのでござりまするし
それの通らぬ世界など一刻も居りたくないと
傲慢ごうまんにもそないに考えていたのでござりまする

そないな浅墓あさはかな考えがござりましょうか
それでも
それでも考えていたのでござりまする
何故誠実が価値がないのか
何時も何時もそれ許ばかりを
考えていたのでござりまする
悲しゅう　本当に悲しゅうてならぬ時*百十
私は夜を多摩川の堤を歩き
││それはその夜ばかりではありませなんだが
誠実が価値をもてなかったのは
本来誠実そのものに価値が
ないのではないかと
ふっと　そないな思いが
うかんで来たのでござりまする

誠実に価値がない
その時の思いは私にとって
誠に青天の霹靂へきれきとでも申せましょうか*百十一
私の生きる信条としていたものを
棄て去ることは││
けれども嬉しゅうござりました*百十二
ほんとうに嬉しゅうござりました

つまり誠実とは私の生きる
方便ほうべんにすぎないものをと*百十三
そう思えば
人それぞれが生きる中に
名辞をもて実にかえていた私がよう解わかりまするる*百十四
私は本当に嬉しゅうございました
誠実など価値なきものと
けれども
私はそのように生きて来たと思えるし
これからも生きて行こうと
考えたのでござりまする

けれども私はもう去いなねばなりませぬ
もう遅うござりました
本当に遅うござりましたけれども
私は私の生命がよりよう生きて行けるように思えましたし
そうして
私は私についてもう何も否定しようとも
或あるいは強しいて肯定しようとも
思いませなんだ*百十五
好きな方は好きな方だとそう思えばいいのだとも
考えたのでござりまする
それ以上でもそれ以下でもなく
その心が生きている間は
そうなんだと思えばいいのでござりまする

本然の生命に生きるなどと申して*百十六
私の考えてみまするに
それも亦また名辞でこざりまして
実からは遠うござりまする
生きることの空無な
そうして淋しさが

私にもようよう解って参りました*百十七
とらわれた私の生命は
もはや生命ではございませなんだ
其処からは何も生まれては参りますまいに
どうにかして
もう何ものにもとらわれない
私になりとうございまする
とらわれなければ
私はもっと広うございまする
世界は広うございまする
どうぞ　どうぞもう何も申して下さりまするな
愚かではありましたなれど
何とぞ
何とぞ何時も何ものにもとらわれぬ
私に何時かはなるであろうと
そればかりを
もしお心にかけて下さるならば
みつめて居てくださりませ

枯野

旅に病んで夢は枯野をかけ廻めぐる*百十八

芭蕉

野は荒涼として展ひらけ
冬日　灰色の雲低く垂れて
空を舞う孤鳥に等しく
一筋の風雅の誠を求めてさまよう
永遠の旅人
芭蕉翁ばしょうおう

詩は常にあなたの中に生き
鬼愁きしゅうの息は*百十九
あなたを一処ひとところにとどめることを知らず
憑意ひょういのおもむくところ*百二十

あなたの肉体はあらゆる困苦こんくを冒おかし*百二十一
全まったき孤独を
一人身肉しんにくに傷いたみつつ*百二十二
永遠の詩の世界を
あなたは追求してやまなかったのだ

永遠の孤客*百二十三
芭蕉翁
私は今あなたの前に拝脆はいきし*百二十四
あなたの心の
底深い心理の秘密を求め
常に
あなたに等しい東洋の詩人達が求めた

自然の　悠遠の底にねむる
真理の相すかだを
私の貧しい心にも映してみようと
こころを
一心に誓って
歩あゆまい行くものであります*百二十五

芭蕉翁
あなたの象徴の世界に映った
透すいて朽ちるなき久遠くおんの匂いこそ*百二十六
幾千万の詩人達の心に
果つるなき芸術の香りを伝えて*百二十七
その一句を口ずさむ人の心を
一分いちぶのゆるがせも得ぬ厳粛げんしゅくな思いと
高遠なる理想に身を駆りたてる
激しい情熱の中に
どれ程導いたことでありましょう

遠い元禄の世*百二十八
旅に生き旅に死んだあなたの姿よ
行脚あんぎゃなす幾百里の行程の中に*百二十九
あなたの頭髪は風霜ふうそうに洗われ*百三十
あなたの痩軀そうくは病巣に侵おかされ*百三十一
尚なおも苦念くねんに生きる
不滅の精神こそ
私は　私の中に
しかと押し戴いただきたいと
心に念じてやまないのでございます

その見る処の　あらゆるものに
驚威きょういを持ちて*百三十二
此の私達の世界に充満する

自然の気息を*百三十三
確しかと捉えられた
彫鏤の一七音*百三十四
おお
然しかも　荒涼の秋霜しゅうそうの中に
或る日は
暮秋ボシュウ歎タンズルは誰タガ子ゾ*百三十五

その腸はらわた絞しぼる詰屈きっくつの精神は*百三十六
心情の自由を求めて
一歩を　一歩をと歩あゆまいつつ
その純粋な瞳に
不易ふえきの世界を捉え*百三十七
然も停滞することなき
明めい自在の精神は*百三十八
推移なす世界の
万象ばんしょうの相すがたを捉えて
止やまなかったのでありましょう

あなたの心の如何に自在にして深く
あなたの瞳の
如何に純粋にして澄明ちょうめいであられたことか*百三十九
その生涯を
然も　詩をむさぼる如く
追求してやまなかった
精神のありようの
如何に毅然として高く
私等ごときものの及び得ぬことか

けれども
私は然しかく　あなたの歩んだ道に*百四十
遠く及ばぬけれども

苦念に侵されつつも　苦念に耐えて
此処の　自然の　悠遠の相すがたと
その中に於ける私の位置をたしかめ
且かつは　あらゆる事象に宿る
真理の相すがたをたしかめ
一切のそれらを私の中に呼び起こし
そのまことの心を
私の拙つたなき筆に写し置かんとするものであります

私の心は貧しく
私の言葉はいやしく
私の詩は不朽ふきゅうの香りを持つことは*百四十一
出来ないかも知れぬけれども
尚も真理に恋こがれ
道を求めてやまない
此の私の心こそは
あなたの風雅に生きた
一筋の誠の心と
何等変易ないものと*百四十二
私には信ずることが出来るのであります

野は灰色の景かげに染そむ時*百四十三
一人傷いたむ身を抱えつつして
何処知らぬ処を旅して行く人の面影
万象はその人の心に
不朽の生命を宿し
その人の心は
あらゆる存在の中に生きる
吾われと等しき生命を求め
道路に死なば死ななんと*百四十四
誓いつつして
寒月に遊び*百四十五

朔風さくふうに歯ぐきを凍らせつ*百四十六
口ずさむ
一寸の言葉の貴とうとき

松籟しょうらいと海の音や*百四十七
磯辺　波を枕とす
或る日の夢の如何に
春は花　秋は紅葉と
移り行く此の人の世に生きて
遂ついに　此の翁以前　此の翁なく
此の翁以後此の翁なしと
人をして嘆ぜしめた*百四十八
あなたの求道の一念をこそ*百四十九
深く肝に銘じて渇仰してやまない*百五十
私の一筋の心であります

ああ　千歳に不易の道を求め*百五十一
おのれの言葉の中に
その道のありようを表明致し
その言葉をもって
永遠に生きんとする私の心は
たとえ　それが私の性の拙つたなくして*百五十二
なし得ざる処でありましょうとも
あなたの　その心と
如何ほどの相違を持ちましょうか
翁よ
私は私の想念をより純粋ならしめ
私の骨肉に関する慾念と
苦痛を
しっかりと吾が身に受けとめ
苦しみ悶もだえつつも耐えて
何時かそれを乗り越え

私の此の心のありようを
本当にはまだ知らぬけれども
何時かは辿たどりつくであろうと思惟する*百五十三
それは私の本来の心によって展ひらける
自由の天地にまいらせ
それを万人の共通の広場とまで
展開させて行かんと
欲するものであります

詩は此の孤独の心と
苦痛の中に於おいて徐々に醸かもされ
遂には　何時かは
芸術の香り高く醱酵はっこうする時あれば
おお　其処にこそ私の真の喜びはあり
その香りの深くして
遂には　人の心の奥底深く滲しみ行く時
私の骨骸は土に埋もれて*百五十四
死は
静かに、私の心を
遥はるかなる銀嶺ぎんれいの果てに*百五十五
消し去って行くことでありましょう

翁よ
私は今心に深く
あなたの心の奥底深く生きて行くであろう
私の心を感じ
その心こそ私の真なる生命を歩ませて行く
指標であろうと考え
夜を深く
一人居ひとりいの寒き此の室中しつちゅうに*百五十六
秘かなる喜びと
私の本来生きて行かねばならぬ

遠い道程を思い
且かつはその道程の果てに宿る
きらめく清浄な銀嶺のすがたをみつめて*百五十七
静かにほおえむものであります*百五十八

幾許いくばくもなくして
朽ち果てるであろう
私の生命ではありましょうけれども
夢幻と観じつつも
尚此処に生きて行かねばならぬ
私の身肉と精神のまことを
あなたの
常に私の中に生きては
正しく目守まもられんことを*百五十九
心に深く念じつつも
私は静かに筆を置きます

　昭和三十二年一月七日深更しんこう

## 海

海は神々の理念のようにひろがり
水平線は見えぬ
渚なぎさうつ波は
ゆらめく母胎の気息のように
静かである

無限につらなる
絢爛けんらんの思想は*百六十
かって　希有けうの詩人達によって*百六十一
千年をうたいつがれて来た
自然が
燦爛さんらんと統一の中に奏かなでる*百六十二
交響の楽

私は曙あけぼのの砂丘に
凝然ぎょうぜんと立っていた*百六十三

## 荒涼の中から

白分がそうではなかったと言い切ることは
つらいことだけれども
私はそう叫ぼうと思う
自己を否定することの厳しさの中から
私は今歩んで行こうと思っている*百六十四
ああ　私には何もなかったし
私は何もなさなかった
荒涼として淋しい心象の風景の中に
私は　今馬のようにたたずんでいる
そうして
それが何で私に希望であろうか
けれども
それでも歩んで行く
意志ある一頭の馬とならんことを
私は願う
此の私の生とひきかえに
課せられた歩みを
歩み行く私であることを
私は心から願う

## 白い夜の道に

悔恨かいこんを感じることは切ないことだ
人を裏切ることは淋しいことだ
そうして
人を愛することは哀しいことだ
けれども
人に愛されないことが
どうでもいいことのように
それはどうでもいいことなのだ
みんな突き放して終えばそういうことなのだ
其処から白い夜の道が展ける
その白い道を
私は歩んで行こうと思う
此処にぎっしりと詰まった感情の
磨きあげられたところ
其処には何ものかがある
そうして
それをこそ私の本来のものであるという確信に於いて
私は他に譲るまい
私は歩んで行く生命だ
一切は放下ほうげされた　それだ*百六十五

## 生きる

幻影を突き破れば　幻影が生まれる
幻影を抱けば　幻影は消える
生きるということは
そうであった
私は此の侭まま　方向も解らず歩んでいこう
人生がそれだけに過ぎないものを
課せられた歩みを　歩んでいれば
安心がある

## 葱を洗う妹

葱を洗っている妹よ
そんなにも腫れあがった掌を*百六十六
冷たい水につけて
「兄さんそんな寒い処にたって何してんのよ」と
振りむく瞳が
葱のように澄んだ　青空である
ああ　お前のふくらんだ胸が患わずらい
高熱に苦しんだ夜も
兄の生活は夜に爛ただれて*百六十七
血走った眼は
お前を看とってやることも出来なかったのに
その愛らしい口唇こうしんで
お前は「兄さん」と呼ぶ
その　私に親しみが一っぱいのお前の背の
その背のまろく*百六十八
波うっているさまが
兄を限りなく淋しくする
妹よ
葱を洗う妹よ

## 天使のような妹

「兄さん」と呼ぶお前の声が
乾いた私の背せなにする時*百六十九
枯葉を捲まく夕暮の風の中に在って
私は振返る
ああ　妹よ
私はお前と並び　お前と歩んで
此の白い道を何処までも
歩んでいこう
孤独な私の心に投げこまれた
菓子のようなお前のふくらみのある心
無縁な人には解らない
兄と妹の情をはらんで
どこまでも歩んでいこう
「兄さん」と呼ぶお前の声に
一刻苦しかった兄の心の
針のような思いが
振返れば其処には愛らしい天使のような
けれども
貧しい服装の妹がいる

嫁ぎ行く妹

私は簞笥たんすを開けて
下着を出そうと思った
簞笥の中はがらんとしていた

門の処で泣いていたお前
「はやく行きなよ」
私はお前の肩をそっとたたいた
泣きはらした眼が
私をみつめて「さようなら」と言った

何時もは一杯になっている簞笥の中
お前のも私のもごちゃまぜで
私は癇癪かんしゃくを起こして
お前の下着を座敷の真ん中に
放り出したこともあったのに

過ぎ去った歳月が急にかえって*百七十
私はむなしい淋しさを覚えた
妹よ
今頃お前は汽車の中で
何を思うていることか
この感傷がやり切れないのに
簞笥の中の
こんなにも綺麗きれいさっぱりしていることが
私には腹立たしいのだ

お前が行ってしまった座敷の中は
昨日までの夜具敷団や*百七十一
荷造りされたミシン台だの

あらゆるがらくた類を詰めた林檎箱りんごばこだの
何だかんだがみんななくなり
私は一人
肱ひじを枕に寝そべっているのだが
お互いが
たまに心に思い描くような
そんな他郷に*百七十二
お前は行ってしまったのだ
人間が結局は別れねばならないこと
私は一つの感傷も持ちたくないと思ったのに

お前が母に遅れて
門の処で一人泣いていた時
下駄をはいてお前の後に立った私は
何故か耐えられぬ気持のままに
「はやく行きなよ」と
お前の肩をとんとたたいたのだ
そうしてお前は「さようなら」と
眼にいっぱい涙をためながら
いってしまったのだ

私はずーっとお前のうしろ影をみつめ
そうして
通りに隠れてお前が見えなくなった時
それでも
まだ耐えねばならぬ感傷を
心にいっぱいもっていたのだ

ああ 口数の少すくない二人は
何を語りあうと言うこともなかったけれど
こうしてお前が去って行った日
私は私がお前の兄であることを

たまらなく感じてならないのだ

小さかった私とお前が
或る日は何かでいさかい
共に泣いた日もあったであろうに
私は私の生活の殻にこもって
お前を真に思うてみる日とてはなかった

遠い処への
お前の旅立かしまだちの日*百七十三
私はお前が残して行ったはっかの入った飴玉を
座敷のまん中に寝そべりながら
一人何時までもしゃぶっていたのだ

## 存在

木この葉は散り　樹々は口つぐんで
祈禱きとうのようにふるえる梢こずえの先には
何もかも突き抜けてしまう
青空がある
これっきりと投げ出され
物は
その小さな存在を
必死に守ろうとする
そればっかりの執着の故に
大地にしがみつく
小さな　小さな形象のあるが侭ままの姿
誰が奪おうとするでもないのに
失なわれまいとの願いをこめて
けれども
それを静かに肯定する
何物かがある

ゆき山の道に

ゆき山のみちを
何処まで歩んで行くのであろう
ゆき山のみちは果てなく
疎林そりんに映る陽の影も淡い
そんな道を
何処まで歩んでゆくのであろう

あるということは
無いに等しい
無いということも無いはずなのに
ああ　こころは何時も吾侭わがままで
寂しさ許ばかりが
生甲斐いきがいのように
私は何処まで歩んでゆくのであろう

曇り硝子ガラスの遠い天から
微塵みじんのように
ゆきが降って来た
此の冷たさを生き
生きの冷たさに怖おびえつつも*百七十四
虚妄と観じる
私の瞳に
湛たたえられたる湖の色よ
さざなみとなり流れ
涙のごときもの
頬を伝わる

## 雪の底に

千百の夜が続き
みぞれがびちょびちょ降っている
さむざむとしてふるえ
うちひしがれたところから
遠い空を思うけれども
春がくるとは思われぬ
夜の気配に
ああ　私は思いみる
遠い地の　深い雪の底に埋もれた
わたしの魂と　そのなきがらを
生きるとはこうであったかと
静かに語ろうとする
わたしの死の
ほおえみのかけらを

## 死

此の身は土となり　落葉の下に
百の夜を迎える
わが罪はその侭まま　千百の悔いは
言葉とならず
喜びのない日々が
青白い空に消える
落葉がつもり　雪が降り
歳月が流れて*百七十五
全ったくの無に帰し
人々からはさらに忘れられたところ
無いものが　その侭で眠る
墓標は朽ち
風が流れて
そうした日々が
幾千百となく　過ぎ去って行く

## 骨骸戯画

骨よりも白く
骨ばかりの私である
野に転がりてあれば
犬などくわえて戯たわぶれ*百七十六
月の夜は
猿など頭骸ずがいをたたいて
はしゃぎ廻る*百七十七

## 黒い月と骨

渦巻く挙銃の螺旋らせんの中に
骨が転がっている
黒い月が
どくろの内にひそんで
そうして
笑っているのである
その不気味な笑いが
無数に走る螺旋のむこうを
一面に白く染めている

## 骨が鳴る

追いつめれば
まだ何か生まれて来ると思い
もう一度掘り返そうと*百七十八
大地を視つめる
寂しさとは
これではない思い
からからと
骨をうち鳴らしている

## 古い沼

古い沼の淵ふちで
どす黒い裸身の女は
銹さび色の腔口ちつこうから
おびただしい白骨を
分娩ぶんべんした

闇の中を
女の歯ぎしりが
不気味な白線を描いて
走る

般若

本来東西なく
南北もない
時間もなく　永遠もなく
生死もない
無いということもない
無限の空に
存在と価値と
何故に叫ぼうとするか
愛せんといい
愛されんと欲っし*百七十九
所為しょいを病やまいに生きて*百八十
何に執著するか
ああ
かくて一杯の酒に生きて*百八十一
極道ごくどうの世界を行く

## 私の詩について　一

もう底に何もない
乾ひからびた心を抱えて
歩んで行く
そうして
私の殻をたたき
ひき千切ちぎり
私の詩をまき散らして行く
それが
救いならば救いであり
そうでないならばそうでない世界を
歩み
それが私の道であることを
毛髪の尖端せんたんに至るまでも
了知りょうちする*百八十二

## 私の詩について　二

風に身をさらし
坦々たんたんたる孤独の道を行く*百八十三
総ては枯れ枯れの
冬の気息よ
更に私をうちのめしてくれ
ひしがれた心ながらも*百八十四
深く　冷たい息を吸いとり
厳しく律する世界を
瞭然りょうぜんときわめれば*百八十五
即ち其処に
燦然さんぜんと詩の輝くことを
信じる

## 私の詩について　三

めらめらと
燃える火の中に私を投じ
喘あえぎ苦しみ悶もだえる叫びが
わたくしの詩でありたい
自みずからが
燃える肉体を掲げて歩む
それが詩の
私の歴程れきていでありたい*百八十六
灰となり崩れ
死よりも静かなる灰殻のささやき
ああ
それが私の詩でなくて
何としょう*百八十七

私について　一

人間の中から
人間を絞り尽くし
人間でないところまでも
人間をつき放し
木偶でくの棒のように突っ立ち*百八十八
それでも溢あふれくる
涙のようなもので
私は
私の空間を
構成する*百八十九

私について　二

ずんずんと追いつめて行けば
何もなくなる
悲しみも　苦しみも
喜びさえもである
何もなくなる
其処から生まれくる
異質の　本質の
それさえも||
ああ
かくて織りなす私の生の
絢爛けんらんと豪奢ごうしゃの故をもて*百九十
私は今日も
街へ
颯爽さっそうと酒を飲みに行く*百九十一

## 秋の日

死に行きしものには*百九十二
唾つばすればよい
傲然ごうぜんと頭こうべを持じして屍しかばねを視つめ居し日*百九十三
傲然と頭を持して||
今は己おのれの屍を視つめる思い
野分のわきあとの草ふせる川原辺かわらべに*百九十四
空晴れわたる午後
此処に死が暗く宿る胸に
尚なおも息づきと呼摶こはくを聞く耳に*百九十五
情熱の底涸れる思い
尚も死に蹈ふみとどまりて
枯草に歩を歩ませる
秋の日

後記

私がかって歩み*百九十六　現在も尚なお歩もうとする一つの意志であることに相違あるまい　私は私がかって持った喜びの中に　全身的に没入したし　悲哀絶望に於いても　それと全的な精神をもってたたかって来たことを信じる　そうして　真面目に　余りにも真面目に生きようとした私は一切に敗れた

それでも私は救われねばならない　私は私の一切を　何ものかの中に換置かんちしようとこころみた　それは天であろうか　それは自然であろうか　或あるいは又また詩であり酒の世界であろうか　私がかかる何ものかの世界にある　その時　私は遂ついには冬日の中を歩み行く　一頭の馬であったかもしれぬ

ああ私は荒涼の中を　悲哀を含んで今歩み行く　此の荒漠こうばくの果てにあるものが　何ものとは知らぬけれども　かって其処に出発し　今此処にあるものが　孤独の中にあって生き抜く力について　私は私の中に　ひたすらの祈念をもつ

寒菊は枯れぬ季節は何時の日か春とならん
外套や吾に天使の訪れなく　　　　　　　　八木九鬼

私は肩に重たき冬雲を戴いて歩み行く　一の象徴でもあろうか

昭和三十六年十二月三〇日深更

髙野　邦夫

## 略年譜

昭和三年五月十三日　川崎市南河原（現、幸区南幸町）に生まれる。父勝吉かつきち。母こと。三男。
昭和十九年三月　神奈川県立神奈川工業学校三年を修了。（十五歳）
昭和十九年四月　海軍甲種飛行予科練習生として奈良海軍航空隊に入隊
昭和二十年　終戦　復員
昭和二十一年　日産重工業株式会社入社
昭和二十二年　日産重工業青年学校入学
昭和二十三年三月　青年学校卒業、日産重工業退社
昭和二十三年四月　日本大学高等師範部国語科入学
昭和二十六年三月　同学卒業
昭和二十六年四月　川崎市立中学校教諭となる。この年以降、市内の臨港中学や西中原中学で国語を教える。
昭和三十七年二月　第一詩集『寒菊』（五月出版）発表
昭和三十七年四月　小泉孝子と結婚
昭和四十年四月　川崎市立工業高等学校定時制の教諭となる。
昭和四十四年二月　雑誌『鷹』第一号発刊
昭和五十二年十一月　雑誌『鷹』第二十号
昭和五十三年七月　詩集『氷湖』（昭森社）
昭和五十四年　雑誌『鷹』第二十七号発行、以降廃刊。
昭和五十五年一月　詩集『燦爛の天』（昭森社）
昭和五十五年八月　出版記念会、化膿性股関節炎発病。以降入退院を繰り返す。
昭和五十七年九月　詩集『定時制高校』（昭森社）
昭和五十八年三月　詩集『川崎』（昭森社）
昭和五十九年四月　詩集『修羅』（昭森社）
昭和六十年四月　詩集『彫刻』（昭森社）
昭和六十年十二月　詩集『曠野』（芸風書院）

昭和六十一年七月　詩集『銀猫』（昭森社）
昭和六十二年四月　句集『高野邦夫句集』（芸風書院）
昭和六十二年十二月　詩集『日常』（昭森社）
平成元年十二月　詩集「川崎（ラ・シテ・イデアル）」（教育企画出版）
平成三年七月　詩集『短日』（吟遊社）
平成五年一月　詩集『峡谷』（吟遊社）
平成六年九月　詩集『鷹』（吟遊社）
平成七年八月　詩集『敗亡記』（吟遊社）
平成九年四月十四日　敗血症により、横浜市青葉区の昭和医大藤が丘病院で他界（行年六十八歳）。四十九日の法要の後、川崎市宮前区の初香山本ほん遠のん寺じに埋葬。法名は「至徳院法教日邦信士」
平成十年四月　詩集『廃園』（遺作）（吟遊社）

*一　「且って」とあるが、漢字で表記するなら「曽て」となるはず。副詞なので、「かつて」を促音化した「かって」に改めた。
*二 原本には「才月」とあるが、すべて「歳月」に改めた。
*三 「馥郁」とは香りがゆたかにこもるさまを表す。
*四 荒撫とは土地が荒れて雑草が生えているさまを表す。
*五　「なでる」なら「撫でる」と表記すべきだが、「馴（な）れる」の意味も兼ねているのか？
*六 「真夜」とは「真夜中」のこと。
*七 小田急小田原線の鶴巻温泉駅のこと。
*八　厚木駅は小田急小田原線、ＪＲ相模線の駅。厚木とあるが、厚木市ではなく、海老名市にある。
*九 「潺湲」とは水が清らかに流れるさまを表す。
*十 光悦とあるが、光の喜びを表すと思われる。「光」と「法悦」から作った造語か。
*十一 小波は「さざなみ」または「こなみ」と読む。
*十二 「紛擾」とは、「もめること」「紛争」を表す。
*十三 注一にならって「且って」を「かって」と改めた。
*十四 「呱々」は生まれたばかりの赤ん坊の声を表す。
*十五 「ぬくとみ」は「ぬくとい」（温かい）に接尾語の「み」をつけて名詞化した語。
*十六　如何は通常、「いかん」「いかが」と読むが、ここでは「いか」と読ませたいのだろう。
*十七 まなかいとは目の前のこと。
*十八 「貪婪」とは欲深いことを表す。
*十九 「諒」とは真実であること。
*二十 陶艶とあるが、陶酔に艶の意味を含ませた造語か。
*二十一　原本では花野㈠となっているが、電子書籍のリンクを張るために、花野　一と表記する。以下、括弧付きの漢数字は同様の処理を行う。
*二十二 荘厳とはおごそかで重々しい様子。「そうごん」または「しょうごん」と読む。
*二十三 「劫初」とは「この世の初め」を表す仏教語であり、「たゆとう」は漂うこと。
*二十四 「蕭条」とは「物寂しい様子」を表す。
*二十五 「しばたく」とはまたたくこと。
*二十六 「かそか」とはかすかなこと。
*二十七 「マイカナイト」とは人工の雲母（うんも）板。
*二十八　「「ねぶる」は眠ること。「月日貝」は二枚貝の一種で、貝柱は食用に、貝殻は貝細工に用いられる。
*二十九 「耳朶」とは耳たぶのこと。
*三十　たゆれるとあるが、「たゆたう」と「揺れる」から作った造語か。うつぎはユキノシタ科の低木。
*三十一 「アペイロン」apeironはギリシャ語で「限定のないもの」を表す。
*三十二 「アポロ」はローマ神話における太陽神。
*三十三 たまゆらは、しばし、ごく短い間を表す。
*三十四 印するとはしるしをつけること。
*三十五 「茫漠」とはとりとめもなく広いこと。

*三十六 「むべ」とはもっともだとして納得すること。
*三十七 「パーコレーター」は「コーヒー沸かし」のこと。
*三十八 「ヒスタミン」とはかゆみなどを引き起こすアレルギー物質。
*三十九 「留別」とは旅立つ人が留まる人に別れを告げること。
*四十 「騒擾」とは騒ぎ乱れること。騒動。
*四十一 降りそぼるとは、雨がしとしと降ること。
*四十二　「埋火」は「いけび」、または「うずみび」と読み、灰の中に埋めた炭火のことを言う。
*四十三　　　「虚仮」とは仏教語で真実でないことや、外面が内面と異なることを指す。「きょか」とも読む。
*四十四 「私自信」と原本にはあるが、「私自身」の誤植かは不明。
*四十五 形容詞の終止形につく「ゑ」には、強い嘆息が込められている。
*四十六 「のごう（のごふ）」はぬぐうこと。
*四十七 「つばら」は「つまびらか」「くわしい」という意味。
*四十八 「眼窠」とは眼窩（がんか）、眼球のこと。
*四十九 山景とあるが、山影のこと。
*五十 幌尻岳は日高山脈で最も高い山。「ポロシリ」とはアイヌ語で高い山を意味する。
*五十一 「モシリバ」はアイヌ語で「最果ての地」を意味する。
*五十二 原本には「凌って」とあるが、「浚って」と改めた。
*五十三 「屍」は死体のこと。「かばね」または「しかばね」と読む。
*五十四 「渺々」とは果てしなく広いこと。
*五十五 「きゆうつと」とあるが、誤植と思われるので、「きゅうっと」と改めた。
*五十六 「か黒い」の「か」は接頭辞で、形容詞の意味を強める。黒々としている。
*五十七 彫塑とは彫刻のこと。
*五十八 処は「ところ」または「とこ」と読む。
*五十九　「実にさびしい。桜の花のあたりに、あすなろの花が咲いている。あす習うなどと言ってはいけない。人生は短いのだから」といった意味。
*六十 深甚とは奥深いこと。「しんじん」で古くは「じんじん」と読んだ。
*六十一　闌くるとは真っ盛りになること。「流離」は「さすらい」または「りゅうり」と読む。広寒宮とは月の都にある宮殿のこと。
*六十二 神奈川県川崎市幸区にある南武線の駅周辺。
*六十三　横浜市と川崎市をまたぐ形で存在した新鶴見操車場のこと。現在では廃止され、横須賀線の新川崎駅が新設されたほかは、機関区、信号所を残すのみとなった。
*六十四　夢見が崎は川崎市幸区の地名。太田道潅がこの地に城を築こうとしたが、夢で兜を鷲に盗み取られる夢を見て築城を諦めた故事にちなむ。三つ池は横浜市鶴見区にある三ツ池公園のことで、広い池のある桜の名所である。
*六十五 凝然とはじっとして動かないこと。
*六十六 毅然とは少しも動揺しないさま。
*六十七 「美しゆう」とあるが、「美しゅう」という現代仮名遣いに改めた。
*六十八 画然とは「はっきり」「くっきり」という意味。
*六十九　セピアとはイカの墨から作る暗褐色のこと。暮れなずむとは、なかなか暮れないという意味。
*七十　　「例え」とあるが、譲歩的条件を表すので、漢字なら「仮令」となる。副詞なの

で、ひらがなに改めた。
*七十一 淵底とは淵（ふち）の底のこと。
*七十二 注一にならって「且って」を「かって」と改めた。
*七十三 寂寥とはものさびしいこと。「じゃくりょう」とも読む。
*七十四 夢寐とは、眠って夢を見ている間のこと。
*七十五 代赭色とは赤褐色のこと。
*七十六 「アスフアルト」を「アスファルト」と改めた。
*七十七 ヘーゲルの弁証法で、対立する物をより高次な段階で統一すること。
*七十八 塵埃とは「ちり」と「ほこり」のこと。
*七十九 原本に寸砂とあるが、寸秒に改めた。胸郭とは胸部の骨格のこと。
*八十 間隙とはすきまのこと。
*八十一　雲母は珪酸塩(けいさんえん)鉱物で、熱や電気の絶縁体として用いられる。きらきら光るところから「きらら」とも呼ばれる。
*八十二 蒼冥とは暮れてゆく空のさま。
*八十三　「犇（ひし）み鳴る」とあるが、「犇（ひし）めく」と「軋（きし）む」から連想された造語か。
*八十四 敗衂とは戦いに敗れること。
*八十五　「ひしやげた」とあるが、「ひしゃげた」に改めた。押しつぶされたさまを表す。
*八十六 「鈍びる」とは「鈍（にび）色、濃いねずみ色になる」という意味か。
*八十七 思惟は「しゆい」または「しい」と読み、考えをめぐらすこと。
*八十八 代赫色とは茶色のこと。
*八十九 起重機とはクレーンのこと。
*九十　原本に　「対恃」とあるが、「対峙」に改めた。対峙とはにらみ合って動かないこと。
*九十一 凄烈とはすさまじく激しいようす。
*九十二 千鳥町も水江町も、川崎市川崎区の工場地帯の地名。
*九十三 街衢とは、店などが建ち並ぶにぎやかな土地のこと。
*九十四　支那町にはルビがついていないが、チャイナタウンと読ませるつもりか。現在なら支那の表記は避け、カタカナ書きか中華街とするのが一般的。
*九十五 厨房とは調理を行う部屋。台所。
*九十六 鶏冠は「とさか」または「けいかん」と読む。
*九十七　「去ぬ」は「往ぬ」とも書き、「立ち去ること」を表す古語。方言では会話でも用いる。
*九十八 「そないに」は「そんなに」を意味する関西方言。
*九十九 「どないに」は「どのように」を表す関西方言。
*百 聳り立つとは、そびえ立つこと。
*百一 「出来ませなんだ」は「できなかった」という古風な関西方言。
*百二 「例え」とあるが、副詞の「たとえ」なのでひらがなに改めた。
*百三　「いぶる」はくすぶること。「くすむ」はさえない色になる、物思いに沈む、無愛想になるなどの意味がある。
*百四 事相とはありさまや様子のこと。
*百五 「ごちやごちや ] は現代仮名遣いに改めた。

*百六 「がむしやら」も現代仮名遣いに改めた。
*百七 焦慮とは、あせりやいらだちのこと。
*百八 原本には「かいたて」とあるが、「かきたて」の音便化した表記か。
*百九 名辞とは概念を言葉で表したもの。
*百十 「悲しゆう」を現代仮名遣いの「悲しゅう」と改めた。
*百十一 青空なのに雷が鳴るように、思いもかけないこと。
*百十二 「嬉しゆう」を「嬉しゅう」に改めた。以下の行でも同様に表記を現代仮名遣いにした。
*百十三 方便とは、目的のための一時的な手段。
*百十四 「をもて」は「をもって」の古めかしい言い方。「よう」は「よく」の関西表現。
*百十五 「思いませんでした」の古風な関西方言。
*百十六 本然は自然で、あるがままの様子を表す。「ほんねん」または「ほんぜん」と読む。
*百十七 「ようよう」は「ようやく」の音が変化した語。
*百十八 元禄七年(一六九四)に、松尾芭蕉が死の床で詠んだ句。
*百十九 鬼愁とは漢語で、鬼でさえ悲嘆するほど優れたという意味。
*百二十 憑意は、憑依された心、神霊に取り憑かれた心という意味だと思われる。
*百二十一 原本には「侵し」とあるが、文意を考え「冒し」に改めた。
*百二十二 傷むとは、けがや病で苦しみを感じること。
*百二十三 「こかく」または「こきゃく」と読む。一人の旅人のこと。
*百二十四 拝跪とはひざまずいて拝むこと。
*百二十五 歩(あゆまい)とは、歩き方。ここでは単に歩くということ。
*百二十六 久遠とは永遠のこと。
*百二十七 「果つる」は「果てる」を意味する古語「果つ」の連体形。
*百二十八 元禄年間は江戸初期の一六八八年から一七〇四年まで。芭蕉は元禄七年(一六九四)年、大坂で病没した。
*百二十九 行脚とは修行で諸国を旅すること。
*百三十 風霜とは、風と霜、転じて歳月、星霜を表す。
*百三十一 痩軀とはやせた体。病にじわじわと冒される意味で、侵すの表記を用いたと思われる。
*百三十二 「驚威を持ちて」は「驚きと威厳をもって」の意味。
*百三十三 気息とは息づかい、呼吸のこと。
*百三十四 彫鏤は「ちょうる」または「ちょうろう」と読む。彫刻して飾ることで、ここでは心ゆくまで推敲すること。
*百三十五 暮秋とは秋の終わり、晩秋のこと。
*百三十六 佶屈とはかがまり、まっすぐ伸びないこと。転じて、難解な文章などを表す。
*百三十七 不易は永遠に変わらないこと。不易流行とは絶えず変化する詩の形式が、根本では永遠に変わらないものから生まれていることを表し、芭蕉の俳句の理想を表すとされる。
*百三十八 明とは物事を見通す力。
*百三十九 澄明とは澄み切っていること。
*百四十 然くとは「そのように」の意味で、漢文訓読に用いられた。

*百四十一 原本には「不久」とあるが、文意を考えて「不朽」と改めた。
*百四十二 変易は「へんえき」または「へんやく」と読み、変わることを表す。
*百四十三 景（かげ）は一般に「影」と表記する。
*百四十四 「死なば死ななん」は、「死ぬなら死にたい」という意味。
*百四十五 寒月とは冬の月のこと。
*百四十六 朔風とは北風のこと。
*百四十七 松籟とは松に吹く風、松風のこと。
*百四十八 「嘆ぜしめた」は「感心させた」という古風な言い方。
*百四十九　　求道とは真実を求めて修行すること。「ぐどう」または「きゅうどう」と読む。
*百五十 渇仰とはあこがれ求めること。「かつごう」または「かつぎょう」と読む。
*百五十一　千歳は長い年月のこと。「せんざい」または「ちとせ」と読む。「せんざい」は千載と表記することが多い。
*百五十二 原本には「例え」とあるが、譲歩的条件を表すのでひらがなに改めた。
*百五十三 思惟とは考えることで、「しゆい」または「しい」と読む。
*百五十四 骨骸とは骨だけになった死体。骸骨。
*百五十五 銀嶺とは、銀色に輝く雪山のこと。
*百五十六 一人居とは一人住まいのこと。
*百五十七 清浄は「せいじょう」または「しょうじょう」と読む。
*百五十八 ほおえむとはほほえむこと。微笑。
*百五十九 目守るとはじっと見つめることで、そこから「守る」という用法が生まれた。
*百六十 絢爛とは光り輝いて美しいさま。
*百六十一 原本には「且って」とあるが、ここではひらがな表記に改めた。
*百六十二 燦爛とはまばゆく光輝くさまを表す。
*百六十三 凝然とはじっとして動かないこと。
*百六十四 原本では「思つている」というように、促音便の「つ」が大きい。
*百六十五 放下は「ほうげ」または「ほうか」と読み、捨てて顧みないこと。
*百六十六　原本では「腫れあがつた」というように、促音便の「つ」が大きく表記されている。
*百六十七 爛れるとは、心身が健全さを失うさま。酒に溺れていたことを暗示している。
*百六十八 「まろい」は「まるい」という意味。
*百六十九 背なとは背中のこと。
*百七十 原本の「才月」を「歳月」に改めた。
*百七十一 敷団とあるが、敷き蒲団のことで「ふとん」と読ませるものと思われる。
*百七十二 他郷は「たきょう」または「たごう」と読む。
*百七十三　旅立ちのことを、古くは鹿島立ちと言った。鹿島神宮の神に旅の安全を祈ったことから。
*百七十四 「おびえる」は、本来なら「怯える」または「脅える」と表記する。
*百七十五 原本には「才月」とあるが、「歳月」に改めた。

*百七十六 「たわぶれる」は「たわむれる」 の古風な言い方。
*百七十七 原本の「はしやぎ」を「はしゃぎ」に改めた。

*百七十八 原本には「堀り返そう」とあるが、「掘り返そう」に改めた。
*百七十九 「愛せん」は「愛そう」、「愛されん」は「愛されよう」という意味。
*百八十 所為とは行い、ふるまいのこと。「しょい」または「そい」と読む。
*百八十一 「かくて」とは「このようにして」という意味。
*百八十二 了知とは悟ること。
*百八十三 坦坦たるとは、道路などが平らなさまを表す。
*百八十四 ひしがれるとは「ひしぐ」の受身で、押しつぶされること。
*百八十五 瞭然とははっきり、明らかなこと。
*百八十六 歴程とは通ってきた道筋のこと。
*百八十七 「何としよう」が音便化したもの。
*百八十八　木偶の棒とは、木の人形、転じて役に立たない人間のことを言う。宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」に「ミンナニデクノボートヨバレ」という一節があるが、それを意識しているのか。
*百八十九　原本ではこの詩に「私について㈡」という題がつけられているが、目次に従うことと、リンクを張る関係上、「私について　一」とし、続く詩を「私について　二」とした。
*百九十 豪奢とはぜいたくで派手なこと。「故をもて」は「理由をもって」ということ。
*百九十一 颯爽とはすっきりして、さわやかな様子。
*百九十二 「死に行きしもの」とは「死に行ったもの」という意味。
*百九十三　傲然とは偉ぶって人を見下すさまを表す。「視つめ居し日」は「見つめていた日」という意味。
*百九十四 野分とは秋に吹く暴風、台風のこと。
*百九十五　息づきとは息をしていること、生き生きとしていること。呼搏とは息を吐くことと搏動。
*百九十六 原本には「且って」とあるが、「かって」と改めた。「かつて」の促音便。